

幕末明治の写真師列伝 第六十二回 内田九一 その二十七

写真師故内田九一の名がその後も高名であったことは、刊行年は不明だが『写真 東京大銘家一覧』の中央に「浅草代地

内田九一同古賀」とあることや、明治8年(1875)の東京名士番付『大家八人揃』(東花堂)に「清水東谷、横山松三郎、内田九一、守山浄夢、加藤正吉、北丹羽(庭)筑波、小林玄洞」の当時東京で有名な写真師の名が記載されていること、九一没後の明治9年(1876)12月に東京で出版された『東京写真見立競』に130軒以上の写真館の名が列記されていて、その中の西の大関欄に「大関 浅草代地 内田九一」とあること、明治10年(1877)5月の『浅草新誌』に、観音境内写場として21軒の写真師の名があり、その筆頭に「内田」の名が見えること、明治十2年(1879)3月版『商業取組評』第18頁の勧進元として「アサダイチ 内田」の名があることなどでもよくわかる。

また『日本写真史年表』明治14年(1881)の項によると、明治14年、写真材料商、桑田商会の桑田正三郎が東京印刷局及び内田九一撮影の写真により印画を複製して販売している。さらに、明治18年(1885)になっても、東京の写真師として、同年(1885)7月版の『東京流行細見記』の第三張目に、「真影屋写四(寫眞師)」として題下に30名の写真師の名があり、そこにも「あさくさ 内田」の名が見られる。

勝海舟が残した『海舟日記』によると、明治3年(1870)8月19日の項に「九一へ写真に行く。卯三郎、[鶴殿]団二郎子の草稿出版を話す。」とあり、これを受けて明治3年(1870)8月24日の項に「小拙写真、岩倉様初め届方頼み。荒井次郎、洋行の節、加え相成り候よう頼む。」と記載されている。このことから、勝海舟が自分の肖像写真を九一に撮影してもらって、岩倉具視に渡したことがわかる。

また、その後の明治3年(1870)9月5日の項に「八木新兵衛、写真遣わす。」とありこの自分の肖像写真の複写を利用していた様子が伺われる。おそらくこの時の勝海舟肖像写真が、株式会社丸善の古写真CD-ROM『本朝写真事始』に収録されている「勝海舟」であろう。勝海舟は安政5年(1858)当時、海軍伝習で長崎に滞在していることから、ポンペや松本良順とも交流していた。また、当然この当時から内田九一のことも知っていたと思われる。勝海舟は明治3年(1870)6月に静岡から東京に戻っていることから、おそらくこの写真も東京浅草大代地の内田九一の寫眞館「九一堂万寿」で撮影されたものとしてまず間違いのないであろう。

以上のことから、同じスタジオの背景、絨毯柄の写った「徳川昭武公の肖像写真」や、「黒田長溥の肖像写真」もこの浅草大代地の「九一堂万寿」で撮影されたものだと思う。

『海舟日記』にはこの他にも、明治五年十月十七日「内田九一、日光、芝、上野の写真持参」明治五年十月廿二日「家内写真。九一へ十両遣わす。」明治九年四月十二日「福田鳴鷲、赤坂屋敷一見。向山並びに御下屋敷へ行く。[内田]九一後見九郎、写真持参。」

明治九年五月一日「(前略)[内田九一、布へ写真出来候旨にて来る]」

明治九年五月八日「入齒師席吉並びに九一方へ行く」

明治九年十月二日「(前略)[内田]九市[一]より支那製寝床一ツ、預り置く。」

明治九年十二月廿二日「西四辻、返金の申訳け。松本良順方へ行く。故九一の唐臥床料五十円渡す。」

と、勝海舟と内田九一の関係を思わせる記述が明治9年(1876)まで見られる。

『海舟日記』には、明治9年(1876)以降にも「内田九一」の名や「[内田]九一後見九郎、写真持参。」と書かれているが、これは後述するが、二代目内田九一のことである。「九一後見九郎」の「九郎」は誰の事を指すのか不明で判らない。

勝海舟の庶子で勝梅太郎の嫁として日本に來日したクララ・ホイットニーという女性が日記を残している。この『クララの明治日記』(明治9年(1876)4月18日の記述に「(前略)おやおさんとアディと私は、その後で一人一人の写真も撮っていた。私は巨大な日本の傘を拵げて写っている。店の主人、内田さん(浅草の写真師、内田九一)が亡くなったので、今は親戚の人が仕事を受け継いでいるが、その人はまだ仕事に慣れていない。(後略)」とある。

外務省外交史料館蔵『朝鮮国修信使金綺秀來朝關係、第一』明治9年(1876)6月9日の項を見ると、「(前略)一同九日午前修使及属官数多内田九一ヲシテ写真セシム我ヨリ之ヲ勤ルニ因ルナリ」という記述もある。

さらに明治9年(1876)10月16日「読売新聞」朝刊三面には以下の記事がある。

「○昨日は品川町の萬林にて東京の寫眞屋さん達が寄り合ひましたのは是まで隣町に居る同業の人でも口をきいた事が無いから以来はおたがひに心易くしたいといふので今の内田九一さん清水東谷さん北庭筑波さん江崎禮二さんと始め其外が夕かたから寄合ひました」

と、ここには「今の内田九一さん」とある。

内田九一は明治8年(1875)2月17日に亡くなっていることから、これらの、明治9年(1876)以降の諸書に内田九一の名が見られることに疑問を持っていたのだが、明治18年(1885)頃まで、内田九一を継いだ二代目内田九一(写真館主)がいた。このことは、明治10年、11年の福田栄造編『懐中東京案内』(同盟社、1877年、1878年)の有名写真所に「浅草代地 内田九一」とあることや、明治14年(1881)3月の児玉永成編『改正 東京案内』(錦栄堂蔵、1881年)、明治16年(1883)4月の児玉永成編『増補 東京案内』(錦栄堂蔵、1883年)、明治17年(1884)1月の児玉永成編『東京案内』(錦栄堂蔵、1884年)の写真師の名に「浅草代地 内田九一」とあること、明治18年(1885)7月刊行の登亭逸心ほか著『東京流行細見記』(清水市次郎、1885年)に「内田(浅草)」と見えることなどからも確認できる。

(森重和雄)